

着任のごあいさつ

林産試験場長 及川弘二

4月1日付け人事異動で、林産試験場長に着任いたしました。前職では、道有林の整備管理・木育・林業普及指導事業等を担当しており、木材産業振興に直接携わるのは20年ぶりになります。また、林産試験場は、30有余年前に新規採用された際、近文町の旧林産試験場で研修を受けて以来のことで、懐かしさと緊張感と時の長さを感じながらの勤務です。一時も早く林業・木材産業と地域へ貢献できるよう努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

この30年間、社会・経済はもとより、森林や木材産業を巡る情勢は大きく変わりました。高齢化や人口減少の進展等により、労働力不足や子育てなどの課題が顕在化する中であって、先達の努力の結果、森林資源は人工林のみならず天然林も順調に生育し、現在は人工林からの針葉樹などの供給が中心となっていますが、広葉樹の供給も期待が持てる状況にあります。また、木材利用は、無垢の利用から集成材や合板などでの利用が増え、資源を効率よく利用する加工技術が定着してきました。

一方、森林や森づくり等に対する道民の関心も高まり、例えばホームセンターでチェーンソーや刈り払い機が普通に販売されるなど、林業等を生業としない方々が森林に興味を持ち、学び、実践する、アマチュアのプロ化、いわば新しい「森林・木材シンパ」も増えています。

国では、利用期を迎えた森林資源を背景に、林業・木材産業の成長産業化を図る政策を進めており、道でも、昨年改正した「北海道森林づくり条例」に基づき、この3月に「北海道森林づくり基本計画」を見直し、原木の安定供給体制づくりや地域材の利用の促進など、新たな取組を始めています。

道の22の試験研究機関が独立行政法人に移行した時、丹保理事長は「伝統的な仕組みを越えた取り組みが必要」とされました。地域材の利用を促進し、林業・木材産業を成長産業として育て、地域の活性化を図っていくためには、地域に賦存する森林資源や木材加工施設を、効率よく利用し、適切に持続させていくことが重要であり、今まさに、これまでの枠組みを超え、新しい発想で試験研究に取り組む必要があります。

我が国の経済成長のゆくえが議論される中、昨年出版された本では、これからもイノベーションにより経済成長を見込む図書と、もはやこれまでのような経済成長は見込めないとする図書と、双方がベストセラーになっています。世の中、それぞれの可能性への期待感と不安感が満ち満ちているといったところでしょうか。しかし、担い手対策が喫緊の課題な中、本道の森林資源を効率よく伐り出し、挽き、使っていくためには、新たなイノベーション・技術革新は欠かせません。イノベーションを進めることによるのみ、未来はあるといえます。そして、イノベーションのシーズは、労働力不足や子育ての苦勞、あるいは仕事の進め方の変化など、生活に身近なところ、あるいは発想を変えたところにあります。林産試験場の先輩は、これからの木材の高次加工製品のイメージとして、「木材本来の性能以上の性能を持つ木質材料部品」とされました。当たり前の中の言い方の中に、発想の転換を求めた表現だと思えます。

世界最大の木造建築といわれる、スペイン・セビリヤのメトロポール・パラソル（複合ショッピングセンター）を知ったときは、圧倒的な量の木材の使い方に驚きました。国内でも、病院の内装材としての木材利用の試みや、木製オートバイ・自動車の製作など、これまでになかった木質材料の施工や豊かな着想による木製品の試作などがあります。さらに、他産業で既に取組まれているICTやIoTなどの技術は、原木や木製品の安定的で効率的な流通・管理システムの構築にも利用可能です。木材利用の発想や他産業の取組の枠組みを超えて試験研究を進め、林業・木材産業の仕組みを、新しく・太く・強くすることにより、イノベーションが果たされていくものと考えています。

着任にあたり、森林研究本部林産試験場は、林業試験場とともに、新しい木材加工の可能性・木材本来の性能以上の機能を持つ木製品・木質構造部材・きのこ等の開発・普及に向けて取組んでいく所存でありますので、皆様方の一層のご理解・ご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

